

# モノの名前の方言

## ——『現代日本語方言大辞典』を読み解く——

神野善治

### 1. はじめに

#### 1) 『日本言語地図』の成果

「民具の名称」に関する基礎的研究をすすめるにあたって、方言学あるいは言語地理学など言語学分野からの研究成果を無視することはできない。とくに、国立国語研究所が行った全国方言調査の成果である『日本言語地図』（全6巻1966年～1974年刊）は、全国の方言の地理的分布を一望できる日本の方言に関する基礎資料で300枚の分布図の原図は圧巻だ（現在ではHPにPDF画像も公開されている）。この中には、動植物などとともに、身近なモノがわずかだが20例ほど、含まれている。列挙すると次の通りである。

「かがみ（鏡）、たこ（凧）、たけうま（竹馬）、おてだま（お手玉）、おかね（貨幣）、せともの（陶磁器）、いと（糸）、きぬいと（絹糸）、もめんいと（木綿糸）、はたいと（機糸）、わた（綿）、すりばち（搦鉢）、すりこぎ（搦粉木）、まないた（組板）、こめびつ（米櫃—一般的な名称）、こめびつ（米櫃—特殊な名称）、とりおどし（鳥威）、かかし（案山子）、いえ（家屋）、ふすま（襖障子）、いど（井戸）」以上。このなかには、道具というよりも素材に近い、糸や綿なども含まれ、なぜか糸は、絹糸と木綿糸と機糸の方言が選ばれているのが面白い。

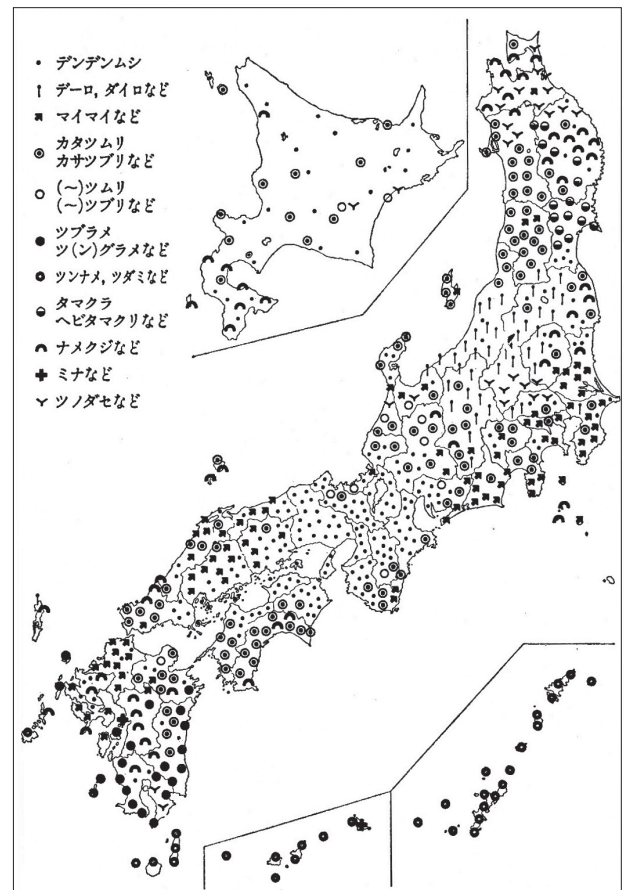
#### 2) 方言分布の意味

大きな地図に緻密なデータが埋め込まれていて、項目ごとの傾向を読み取ることは至難の業だが、幸い中公新書の『日本の方言地図』（徳川宗賢編）が、いわばその普及版として刊行されており、注目される50項目について新書版の小さな版型でも読み取れる独自の方言地図にまとめ直して掲載してくれた。方言の地理的分布に投影された言葉の歴史を明らかにしようとする姿勢は、むしろ原典の『日本言語地図』よりも一般向けの書籍だけにより明快になっており、推奨したい一冊である。入手が難しくなっていたが、再版されている。

モノ（道具・民具）の検討をする前に、項目の中で特に注目しておきたいのが「蝸牛（かたつむり）」の方言の地理的分布だろう（図1）。柳田國男が表明した「方言圏論」の根拠になった事例で、柳田説をほぼ検証するような結果が出ている。国の両端によく似た呼称が分布し、その内側にも同心円を描くように同じ言葉が東西に分かれて分布する。これは、柳田の例えを借りれば次のように説明できる。国の中央

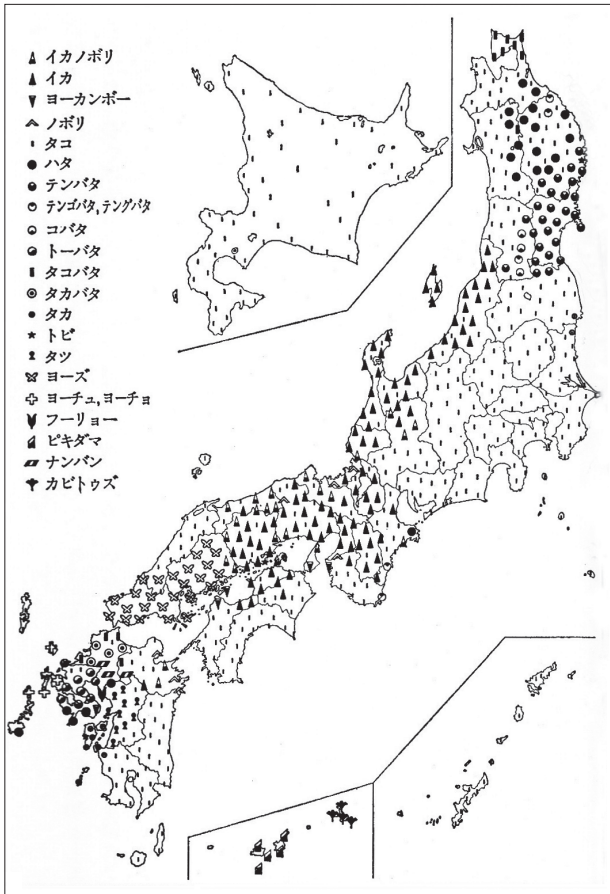
で発生した語彙が、ちょうど池に投げられた石の波紋のように広がって国の端まで到達したが、たまたま日本は細長い島国なので、古く投げられた言葉が国の両端に離れて残った。同様に次々に生まれた言葉が方言となって、同心円状に広がった結果が列島の上に縞状に痕跡を残した。従って国の両端に残るのが古い言葉で、中央に向かって新しい言葉が順番に並んでいるということになる。しかし、これで「方言圏論」が証明されたのかというと、そうではない。調査結果は「蝸牛」のように圏論的分布を示すものは限られており、地理的分布はほかにも多くの傾向を示し、さまざまな要因からその傾向を解説できるとする。たとえば東西を二分したり、伝播の中心が西に偏っていたりする。ただ、「方言圏論」が全く否定されたわけではなく、その後の「方言地理学」の調査研究では、地方を限って局地的な方言分布を行う場合などに圏論的な解釈が有効な場合が認められている。

図1 かたつむり（蝸牛）の方言分布



（徳川宗賢編『日本の方言地図』中公新書、中央公論新社、1979年）

図2 たこ（胤）の方言分布



(徳川宗賢編『日本の方言地図』中公新書、中央公論新社、1979年)

さて本題の「民具」に関する項目はどうだろう。道具・器物に関わるのは先にあげた「せともの」「たこ」「まないた」など数件だけである。しかし、それだけでも「方言の地理的分布」のあり方を示唆して重要だ。

このうち「たこ」などは東西で対立する分布をよく示している(図2)。

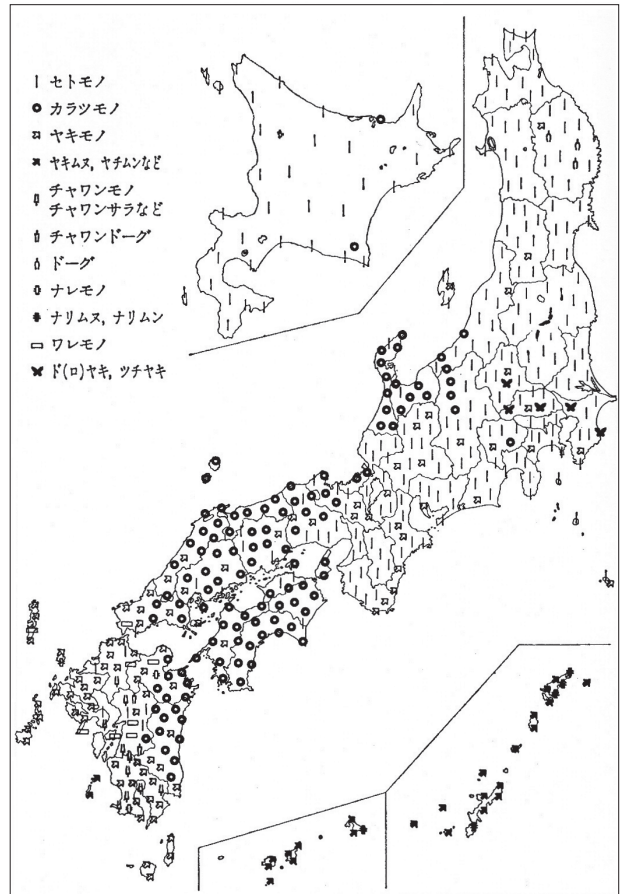
方言分布で興味深いのは、「さつまいも」や「せともの」(図3)などの項目は、東西対立の分布を示すともいえるが、東側で分布が単純で、西側に多くの方言が複雑に分布するパターンを示し、伝わってきた国の名前が付いていることから、モノ自体が、海外から日本の南西端に渡来し、西から東へ伝播していった歴史が見て取れる。

「せともの」の場合も、中世末、近世初頭に製造技術が朝鮮半島から九州(肥前地方)に伝わって産地が形成され、そこから日本全国に伝わっていった状況が伺えるという方言分布を示している。

### 3) 『現代日本語方言大辞典』からの抽出作業

日本語の方言研究の成果は、今後の民具研究の基礎資料になりうると考えられたので、「民具の名称に関する基礎的研究」のチームでは、「共同研究の経緯」に紹介したように、方言辞典の類、柳田國男の監修による『分類習俗語彙』集などからの民具名方言の抽出作業を行って分析を試みた。本稿では、その後、刊行された『現代日本語方言大辞典』(平山

図3 せともの(陶磁器)の方言分布



(徳川宗賢編『日本の方言地図』中公新書、中央公論新社、1979年)

輝男編 明治書院 1989年刊)の成果から、民具名に関連する情報を収集したものを紹介しておきたい。

『現代日本語方言大辞典』(以下『方言大辞典』と記す)は、全9巻、総頁23,000頁に及ぶ極めて大きな方言辞典である。調査項目は18分野の合計2,606項目にわたり、日本語の基本的な語彙が網羅されている。これらについて、日本の全都道府県からそれぞれ数か所ずつ、合計72か所の調査地点が選ばれて、該当する方言が収集されている。

調査項目の分野と項目数を示すと、1 天地・季候(166件)、2 動物(164件)、3 植物(173件)、4 人体(208件)、5 衣(146件)、6 食(202件)、7 住(162件)、8 民俗(120件)、9 遊戯(64件)、10 教育(75件)、11 人間関係(97件)、12 社会・交通(158件)、13 行動・感情(125件)、14 時間・空間・数量(297件)、15 職業(69件)、16 農・林・漁業(150件)、17 勤怠・難易・経済(50件)、18 助詞・助動詞・その他(180件)であり、以上18分野の合計2,606項目が、本文合計18,821頁、索引を加えると23,000頁を越える大冊計9冊に、50音順に記載され、索引が付されている。

その膨大な項目には、『日本言語地図』と同様に、名詞・形容詞・動詞などのあらゆる語彙が選ばれ、各調査地点からの報告が、項目別に50音順にまとめられている。その中からここでは名詞のうち、動植物や人体の部分名、あるいは抽象的な名詞などを除いて、具体的なモノ(とくに生活用具や

生産用具など「民具」と考えられる器物・道具など)に関する語彙を抽出してみた。そして、それぞれのデータから全国的な方言の概況を筆者が読み取る作業を試みた。分野では5・6・7の衣食住や、15・16の生業、8の民俗、12社会・交通などに、該当するモノが散見された。抽出作業の結果165項目の民具に関連する語彙を引き出すことができた。配列は50音順であった項目を、生活の分野別に(衣食住・生業などと)並べ替えた。近接する語彙が並ぶように再配列したのは、民具の名称の比較研究に役立つヒントを見出せるのではないかと考えたからである。

本稿では、項目ごとに、限られた資料から方言の傾向を読み取っているの、あくまで筆者の視点からの評価であることをお断りしておく必要があるだろう。民具に関心のある研究者には、辞典本文の豊富な各項目に収録された個別データの解説から得るものがあると思われるので、辞典そのものを参照されることをお勧めしたい。

ちなみに筆者が、それぞれの方言名を紹介をするとき「富山の」とか「滋賀では」などと示すのは、あくまで『方言大辞典』の「滋賀県の調査地点」からの情報に限られる。また、個別の調査地の例を引く場合は(五箇山)(秋山)などと判別できるように記述した。各都道府県の調査地点は、わずかに1~3地点で、これまでの方言調査で特異な方言が採集されている地点が加えられている。たとえば東京都では、都心と多摩地区に八丈島が加えられている。ただ沖縄県だけは6か所の調査地点が選ばれている。このうち沖縄本島の本部町の調査事例を、(沖縄)と表記しているの、ここでは、県全域を示す場合は「沖縄地方」「沖縄県では」、奄美なども含める場合は「南島では」などと記した<sup>(1)</sup>。

また、後述するように全国的にはほぼ同一の共通名が用いられている項目には、◆印を付した。その場合も沖縄地方のみ特色がある方言名が報告されることが多いので、解説中の沖縄地方の記述の前に★印を付しておいた。

注(1) 沖縄県の調査地点の6か所は、本部町(沖縄)・平良市(池間)・伊良部町(長浜)・多良間村・竹富町(鳩間)。ちなみにカッコ内の地名は『方言大辞典』の事例に添付された表記で、その語彙が(沖縄)とあれば沖縄本島の本部町、(池間)とあれば平良市池間島の事例であることを示している。

## 2. 『現代日本語方言大辞典』の民具項目と方言の傾向

### 1) 衣料・寝具

◆いと【糸】…八戸・安代・山形にカッナ、能登七尾にカナという方言があるのが注目される。糸の古語と考えられている。ちなみに『日本語語地図』には「糸」「絹糸」「木綿糸」「機糸」の全国の方言が詳細に紹介されている。これとの比

較検討は魅力的な課題になるだろう。

◆ふだんぎ【普段着】…フダンギという共通語が、東北ではフッダンギとなり、チネギ(山形)・ツネギ(京都・大阪・兵庫・徳島・香川)・ツネギ(十津川・和歌山)・トゥネギ(大分)が散見される。北陸にはヘーゼーギ(石川)・ヘージョギ(五箇山)があり、九州のヒジギ(宮崎)・ヒジギリ(名瀬)も平生着のことだろう。秋山(長野県)のオチジ、八丈のヘビラが珍しく、熊本のケギモンも貴重だ。「ケ」は晴れに対立する褻(ケ)に相当する語だ。沖縄のヤーハラキヤーは、「家から着るもの」に対応すると説明がある。

◆しごとぎ【仕事着】…共通語としてのシゴトギが全国で通用しているようだが、福島から南、中国・四国地方までノラギ(野良着)の語も重なっている。そのほか、カセギズバン(稼ぎ襦袢:会津)・ヤマギ(奥多摩・新潟・五箇山)・ヤマギモン(甑)・ヤマジモン(秋山)・ヤマイキ(広島)・タンボギ(鳥取・岡山)・トーモギ(愛知)などがある。仕事着の種類としては、アツシ(昔、作業のとき、上に羽織ったごつい織物の着物)・アトウシ(厚い生地のだしこの着物で野良仕事などのときに着る:高知)・ドンザ(福江<長崎県>)が注目される。なお「はんでん」・「ももひき」は別項目参照

◆うわぎ【上着】…全国的にはほウワギであるが、その種類としてハンチャ・ソデナシ・ハンテンの類などが混入し、多様な名称が並ぶ。この項目は、形式や用途を特定しながら、呼称の展開を見る必要がある。

◆したぎ【下着】…総称としてシタギ(東北でスタギなど)という共通語が広く見られるが、ところどころでハダギの語があり、北陸で女性が和服の下に着るものをハダコという例が複数見られる。

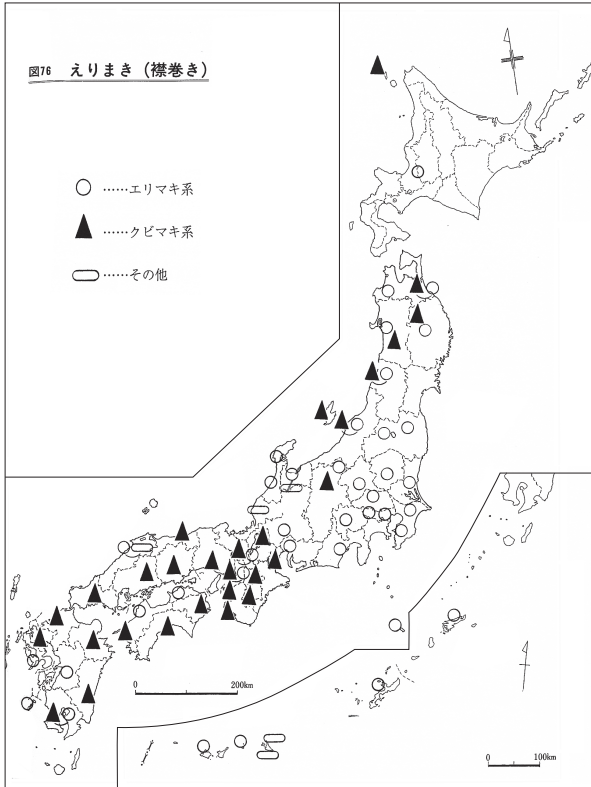
◆じゅばん【襦袢】…ジュバンまたはジバンがほぼ全国的。沖縄地方もジバンかジッバン。福井にハダコの例があるが、前述の下着のハダコと重なる。

◆かさ【笠】…各地から報告があり、種類は、菅笠・編笠を中心に、檜笠・竹皮笠・くば笠・麦藁帽子の例が収録されている。民具として「笠」にはかなり面白い名前が各地にあるが、『方言大辞典』ではあまりバリエーションが見えない。

ちなみに、いわゆる「竹皮笠」になかなか特徴的な方言があることがわかる。

愛知の項目には「竹で作ってもスゲガサという」とあるけれども、西日本には多彩な名称がある。ドンブリガサ(竹で編んだもので導師がかぶったもの:佐渡)・タカーバチ(道中笠。ミノとともに雨天に用いた:島根)・タコーラバチ(岡山)・タコーナバチ(広島)・デンバチ(油木<広島県>)・タケノコガサ(農作業用:徳島)・タカラバチ(農作業用の笠で竹で

図4 えりまき（襟巻き）の方言分布



(平山輝男編『現代日本語方言大辞典』明治書院、1989年)

作ったもの：徳島→タカラバチ系の名には何かいわれがありそうだ。

福岡のタコノバッチョーの例では「竹の皮で編んで作った、やや角度がある笠で、雨よけ日よけになる。農作業用」「ドンゴガサとも言うが各地で次のようにいう」として4例をあげている。トンゴガサ(糸島郡)・タコンバチ(宗像郡)・タコンガサ(久留米市)・バッチョーガサ(八女郡)。

ギンパチガサ(佐賀)・タカンバッチョ(熊本)・バッチョロガサ・バッチロガサ(大分)・バッチョガサ(宮崎)、鹿児島ではバッチョガサを「笠の総称」と説明し、バッチョガサは「菅笠のこと。竹の皮でできていた」と、素材としての「スゲ」は無視されているようだ。タカンバッチョ(甌：竹子笠)も竹笠の意とわかる。

◆かさ【傘】…総称は、ほぼ全国カサであるが、★沖縄地方は、ハサー(沖縄)・サナ(平良・池間・長浜・鳩間)・シャナ(多良間)が広がる。傘の種類として、唐傘(紙を張る=番傘)はバンガサが関西で優勢のようだ。蛇の目傘、蝙蝠傘などがあるが、コウモリが富山・五箇山・石川でコンモリになるぐらいで、これらも方言は少ない。

◆かっぱ【合羽】…沖縄まで含めてほぼ全国一律にカッパだ。そのことは何を意味するか。ビニールガッパではなく、油紙の時代だとしても、新しい工夫として全国に一気に伝播したものかもしれない。

◆うぶぎ【産着】…ほぼウブギが全国的であるが、東北でオ

ボギ・オンボギ・オブギなどといい、これらが長野・岐阜・三重などにも見られる。

◆おしめ【襦袢】…オシメ系、シメシ系、オムツ系、ムツキ系に、★沖縄のチビシウキ系の語が特徴的な分布を示し、分布図が掲載されている。この限られた5つほどの特徴的な方言が、ある程度の地域的な分布域を示していて歴史的関係が予想される。

◆はちまき【鉢巻き】…東北でハチマギとなるほかは全国ほぼハチマキ。

◆えりまき【襟巻】…東北から南島まではほぼ全国的であるが、西日本から近畿・長野・新潟・東北の日本海側にかけてクビマキの呼称が優位にあるように見受けられる。(図4参照)

◆おび【帯】…ほぼ全国オビであるが、東北でオンビ。サンジャクという名が、新潟では男子の帯、七尾では袋帯・兵児帯に当てられ、奈良にサンジャクオビがある。広辞苑では「三尺手拭を帯がわりに締めたもの」としている。名瀬でキビ、★沖縄でヒチュービ・スピウギウ・スクー・スクビウ・シュブギウ・フクビなどがある。

◆おぶいひも【負い紐】…広く使われているのは「オブイヒモ」「オブイヒボ」であるが、「オブイナワ」もある。タナあるいはタンナ、モッタナ(秋田)・モック(河辺)が東北にある。埼玉のカメノコは、佐々木長生氏によると福島にもある。茨城でもオブエヒモが優勢で、ユスコビ・リッコビ・リッコオビが廃語化しつつあるとする。千葉のユスゲオビも関連語だろう。兵庫・熊本のイツケオビ、岡山のイツケが関連するなら「イツケ」「イツケ」が「結わえ付ける」の意味となり、茨城のリッコもつながるかもしれない。このほか、モリヒボ(三重)・モリオビ(大阪・岸和田・奈良)や、四国にスケ(徳島・大洲・高知)があり、池間で「帯」にスクーという方言があることが注目される。鹿児島のカレオツは、甌島のカラーオービと同じで、背負い帯のこと。★沖縄のヒチュービ・クンギヤースクビウ・ツファカサ。

◆えじこ【嬰兒籠】…「嬰兒籠」は用途に相応しい言葉を並べた当て字かもしれない。

東北からエジコだが、只見ではチグラ、南郷村へエズミ・猫用はネコイズミ(佐々木)、長野ではネコチグラ(長井)。

◆こうり【行李】…コーリで全国的にはほぼ変化なし。★平良でピッチウ・ウードウ。

◆さいふ【財布】…サイフ・ガマグチ(蝦蟇口)・キンチャク(巾着)がほぼ全国的にある。関西で銭入れ系、南九州にゼニフゾ(宮崎・鹿児島)、★沖縄地方では、ジンプク・ジン

フクルなど銭袋系の語がある。

◆うちわ【团扇】…ほぼ全国的にウチワだが、オーギ・オンギなどが加わる。東北ではウジワ・ウズワ・オジワなどと変化。\*沖縄のオーギは团扇も扇もこの名で、鳩間のオンギ、平良のオーギウ、池間などのアウジウなどがある。

◆ねまき【寝巻】…ほぼ全国ネマキだが、福島ของーギ、秋山のヨジは夜着。新潟・佐渡でネギモンの語がある。

◆ゆかた【浴衣】…ほぼ全国ユカタ。

◆わたいれ【綿入れ】…東北（福島以外）でワタエレというほかは、ほぼ全国ワタイレの報告があり、その種類が報告されているが、総称で、千葉のノンゴ、福井のンノコ、秋山のノノコが注目される。また、岐阜や大阪にボッコがある。

◆ねんねこ【ねんねこ】…英語説明は“a short coat worn when carrying a baby on one's back”とあり、北海道から九州までネンネコ・ネンネコバンテンが広く見られるが、地域的な方言がいろいろありそうな語彙だ。東北でネンネゴと濁るところがあり、五箇山・七尾でタンゼン・ネンネコタンゼンといい、兵庫でドンブク、和歌山でモリバンチャ、鳥取・島根でコオイ・コーオイ、岡山でオイコ、徳島でオイゴ・オイゴバンコ、香川でオイノコと背負運搬具に通じるような呼称がある。福岡のトンジン（糸島郡でトージン）、大分でブクとあり、きわめて多彩で、丁寧調べたらもっとバリエーションが出てくることが予想される。

◆こしまき【腰巻き】…女性が和服の着用時に腰から脚にかけてまとう布。「コシマキ」の語がほぼ全国的。東北では、コシマギ・コスマギと濁る。そのほか、湯巻き、お腰、下物などの変化がある。

〈湯巻き系〉青森ではヨマキと言うのが古いという。ユマキ（湯巻き：八戸・福岡）・イマキ（兵庫・和歌山・広島・宮崎）・ユモジ（湯文字：山形・佐渡・七尾・岡山・大分）・ヨモジ（新潟・熊本）・イモジ（静岡・島根・福岡・宮崎）・イモシ（福岡）。

〈ふんどし系〉関東あたりから徳島あたりまで広い範囲で、これを古くはフンドシと呼んだところがかなり広い（茨城・埼玉・千葉・新潟・静岡・岐阜・愛知・十津川・徳島）、フンドーシ（広島）。念のためだろう、カカノヘンドシ（富山）、オンナノフンドシ（茨城）・オナゴノフンドシ（愛知）などともいう。徳島で「火事のはきはカカノフンドシを振れ」という防火の伝承があるが、これは各地に伝えられていた。

〈お腰系〉オコシは西日本にかなり広い（滋賀・京都・大阪・奈良・兵庫・鳥取・山口・愛媛・高知・福岡・長崎）。

〈下物〉シタムン（名瀬）・イタムなど。

◆はおり【羽織】…ほぼ全国ハオリであるが、\*鹿児島・沖縄でハオイ、宮古・八重山でハウリ・パウリ。羽織の種類には紋付羽織、夏羽織、冬羽織、袷羽織、一重羽織、茶羽織、中羽織、紹羽織などがあげられている。

◆はかま【袴】…東北でハガマとなるほか、ほぼ全国ハカマであるが、\*沖縄でファカーマ、多良間・鳩間でパカマ。種類としては、本袴、裁付け袴、先代平、夏袴などがあげられている。

◆はきもの【履物】…足に履くものの総称は、ほぼ全国ハキモノあるいはハキモンであるが、宮崎以南に「踏み物」系の方言がある。フンモン（宮崎）・フンモン（鹿児島・甌）・フンムヌ（平良・長浜）・フミムヌ（鳩間）、ムームヌ（多良間）。

◆はなお【鼻緒】…ハナオが全国的だが、ハナゴ（ゴが鼻濁音）が神奈川・京都・大阪・岸和田・兵庫・奈良と関西地区に集中してあり、\*沖縄から宮古・八重山ではバナブーとなる。ブーは「緒」「苧」をいう。

ただ「鼻緒」の紐を部分的に、ハナオとヨコオなどと呼び分けている例が注目される。会津・茨城・栃木などで下駄につける紐のうち、中央の穴に通っている紐をハナオといい、足の甲にハの字にかかる紐はヨコオと呼び分けているのだ。一方、石川の七尾では、かつて下駄中央の紐をモトオ、横の紐をハナオと呼び分け、山口ではハナオは下駄の紐の総称か前緒のみを指し、両側はヨコオと呼び分けていた。

◆げた【下駄】…下駄の総称としてはゲタが主流で、東北地方でゲタと濁音になるほか総称の方言はほとんどないが、\*沖縄がアシダ（足駄）系で、アシギヤー・アッチャ・アシウダ・アチツァがある。ただし、下駄は種類が多く、分類基準も分かれるためデータは交錯している。これをあえて拾うと「駒下駄」（台も歯もひとつの材を刳って作った下駄）をコマゲタ・カラコ（広島）などと呼ぶ。台に畳表などを付けたオモテツギ、高下駄（サイゲタ：鹿児島）、日和下駄（歯の低い差し歯下駄。主に晴天の日に履く）をヒヨリゲタ（滋賀）・スヨリ（八戸）・シヨリ（秋田）。雪下駄をユギゲタ（青森・秋田）と呼ぶ例などが散見される。

◆たかげた【高下駄】…文字通り歯の高い下駄で、ホウの木の差し歯の下駄。これを、そのままタカゲタというのは、東北にも一部（弘前・福島）があるが、主に関東の一部（茨城・東京・奥多摩・神奈川）と、岐阜以西の広い範囲（岐阜・三重・滋賀・京都・大阪・岸和田・兵庫・奈良・岡山・山口・徳島・香川・愛媛・佐賀・大分・鹿児島）に見られる。一方、アシダ（足駄）あるいはアスンダなどの呼称は、北海道・東北地方から北陸に至る地方（北海道・礼文・八戸・岩手・安代・宮城・会津宮城・河辺・山形・栃木・八丈・新潟・富山・五箇山・七尾・福井・長野・秋山）に広がり、前項に示したように沖縄

地方にも同系の語がある。構造上の名称として、福岡にタカバあるいはタカサシバがあり、サシゲタ（油木・熊本・鹿児島・甌・多良間）・サシギタ（平良・長浜）、鳩間はタカアツァ（高足駄か）と呼ばれている。

◆はんでん【半纏】…ほぼ全国ハンテン。そのほかハンチャ・ハンコ・ハンギリ・ハンテに気付く程度だ。ハッピーは、新しい言い方としたり、職人の印半纏や祭り半纏をいう場合に用いている例がある。また、袖無し半纏にふれている例がある。

〔参考〕◆はりのあな【針の穴】…穴の方言がいろいろあって地域色も見られる。アナ系とミズ系（含、ミジ・ミゾ・ミド・ミツボ）、ミミツ系（含、ミミド・ミミロ・ミミズ・ミミズリ）、ミミ系、メド系、メゾ系（含、メジ・メズ・メンズー・メンツー）、メメゾ系（含、メメズ・メメズリ）、メ系の8つに分類され、分布図が示されている。ミズ系は東北に多く全国に、メド系が関東に集中しており、アナ系は関西に多く見られ、ミミ系は中国四国地方に多いように見える。沖縄から八重山はメ系と分類されているが、具体的にはパルヌミーなど「ミー」としている。

◆ひも【紐】…ヒモ・シボ・ヒボ・フィボ、島根でフモ、秋山でフボ、★沖縄でウー、長浜・池間・鳩間はプーとなる。

◆ふくろ【袋】…フグロと訛るのが東北から茨城・千葉まで。ほかにはフクロ。★沖縄地方でフクール・フクルに。鹿児島にフゾがあり、これは「【宝蔵】常に提げる物入れ袋」と説明がある。八重山竹富島で煙草入れをフゾーというのもこの仲間だろうか。

◆はり【針】…ほぼ全国ハリだが、佐賀・鹿児島・甌・★池間でハイ、沖縄でファイ、平良でピイウ、長浜・多良間・鳩間でパル。

◆ふとん【布団】…全国ほぼフトンだが、袖付きの大型の布団をヨギというところ（会津・埼玉・茨城・五箇山・奈良）が広く見られる。同じモノをヤグとも（茨城・富山）。スピ・スボと呼ばれる藁を入れた布団があった（七尾・秋山）ことも紹介されている。静岡では着物の形をした布団をカヤマキと呼ぶ例がある。カイマキの語は出てこないがかなり広くありそうに思われる。★平良でウードゥ、鳩間でウズの名がある。

◆ふんどし【褌】…ほぼ全国フンドシ。★沖縄のサナーギ、平良などのサナジウ、鳩間のサナイが特徴的。名称の中に三尺褌・六尺褌、越中褌などの種類が入ってくる。

◆ぼうかんぎ【防寒着】…4頁にわたって豊富な報告事例が並ぶ。ボウカンギは、いかにも共通語であるが、種類が豊富

で、マント・ガイトウ・カクマギ・トンビ・ケット・ハンテン・ハンチャ・ニジューマワシ・トンチン・モジリ・ヒフ・インバネス・ドンダ・アツシ・ウダイなど機能と特徴あるデザインのボウカンギが混在している。デザインと名称に交錯するところがありそうで、取り組めば面白い分野だろう。

◆ぼうし【帽子】…これも3頁余りの豊富な報告事例がある。シャッポ系（チャッポ・シャッポンなど）の語がかなり広く使われているのが興味深い。たいていの調査地から複数の回答があり、帽子の種類が示されている。中折れ、鳥打ち、山高、かんかん、野球、麦藁、パナマ、ベレーなど。鳥打ち帽には多彩な名称が拾われているのが面白い（ダメシャッポ・チョンコ・チャンコ・ギットボシ・ドンタクなど）。

◆ぼろ【襤褸】…このような項目を拾ってくれているのがうれしい。英語は“tattered clothes: rags”。ほぼ全国でボロ・ボロキレであるが、安代（岩手）でボド、奥多摩でツズレは「使い古したきれ」、愛知・三重でボッコが報告されている。筆者の住んだ伊豆でもボッコだった。これで作ったり、散々ツギハギを加えた襤褸着物のこともボッコといていた。これを五箇山でツギボロ、十津川では使い古して役に立たなくなった衣類をグサラ・グサラーとしている。福岡でボロ。古くはドンザといい糸島郡で漁師の仕事着をドンザという報告している。この『方言大辞典』ではドンザはこの1例のみだが、かなり広く使われている言葉のはずだ。★沖縄でフクター、鳩間でフクダー。平良でヤリギウン、長浜でヤリジウン・ヤリムヌは、破れ衣の意とする。

◆まえだれ【前垂れ】…約3頁分の事例報告がある。マエカケ系が広くある中に、マエダレ系も東北のメアダレ・メアダリ・メアガケなどから、マエダレが、奥多摩・神奈川・富山・奈良・島根・広島・香川・愛媛など広い範囲にある。長野にメアダレ、和歌山にマイダイ、鹿児島はメダレ。沖縄はメアキ、池間・長浜などでマイガキになっている。種類としては幼児用の涎掛けに特有の名称がありそうだ。新潟・秋山のアテンコなど。

◆もふく【喪服】…ほぼ全国モフク。モンツキ系の名が若干見られる。佐渡で「イロキル」というのには要注意。

◆もんつき【紋付】…追加項目らしく事例は少ない。だが、ほぼモンツキ。★池間・多良間などでもモンチュキ。

◆ももひき【股引き】…モモヒキ系（モモヒキ・モモシキ・モモシギなど）が広い。群馬・長崎・鳩間のコシタ（袴下）、広島のゴジタが珍しい。池間にハカマシタがある。パッチ・パッチが富山・大阪・奈良・島根・愛媛・高知・福江・大分・宮崎などに。鹿児島・甌にもパッチー。

◆もんぺ【もんぺ】…戦後からの新しい衣料で、ほぼ全国モンペ。長野の例にオマチャレとあり。「もんぺの類は昔はなかった。山村の人が町へはいてくるのを見てその物をオマチャレと言った」。タツツケは「オマチャレと同じ」としているとある。

◆ようふく【洋服】…ほぼ全国的にヨーフク。

◆まくら【枕】…枕の総称は東北でマグラと訛り、\*沖縄地方でマッフアになるほかは、全国ほぼマクラで同じ。種類としては、箱枕が全国にあり、ハコマクラのほかゲーコマクラ、沖縄地方で手作りのキーマッフアがある。枕に入れる材料で籾殻・蕎麦殻・水・空気などの種類分けがある。

◆こて【鍔】…事例が20数例と少ない。その範囲でコテのほか「火のし」系の言葉が目立つ。スノス（八戸）・シノシ（福島・千葉）・ヘノシ（富山）・ヒノシ（京都）・ヤキゴテ（大洲）が示されているくらい。

◆はさみ【鋏】…総称はほぼ全国的にハサミである。ただ、沖縄地方でハサヤン・ファッション・バサム・バシャムがある。種類としては、裁ち鋏、羅紗鋏などがあるが、洋鋏と和鋏を区別するとき、和鋏をニギリバサミとするところ（東京・五箇山・七尾・長野・京都・兵庫・奈良・和歌山）、ニギリバシャム（多良間）がある。

◆ゆびぬき【指貫】…事例は少ないが、ユビヌキがほぼ全国的。青森でテカワ（手革）、大洲でハリアテ、池間でティガニ（手金）。

◆ゆびわ【指輪】…東北（福島以外）でユビワとなるほか、ユビワが一般的であるが、ユビガネ系の語（エビガネ・エベガネ・イーピングーニー・ウイビガニなど）とユビハメ系の語が並行して見られる。

## 2) 住まいの用具

◆いろり【囲炉裏】…多様な方言がある。全国的にイロリが見られるが、東北にエロリ・エルリ・シブト、能登にエンナカ・インナカ、中国地方など西南日本にユルイ・ユリーが多い。囲炉裏に関しては『日本民俗地図』（文化庁）および、その後の各県版の民俗地図にこの項目があり全国的に詳細な集成ができるはずだ。

◆こたつ【炬燵】…コタツが広くあるが、ほかにコダチ・コダジ・コタズ・コダツなど。別にアンカが混在する。「あんか【あんか】は炬燵のようで運べるもの。土製」（茨城の例の解説）、「やぐらのかわりに、かまほこ型の木の箱を造り、

中に小さい火鉢を入れる」（奥多摩）。バンドコ（五箇山・岐阜）も「手足を温めるための陶製の火入れ」（五箇山）、「瓦製のひらたい行火」（岐阜）として行火の一種としている。さらに置炬燵がある。これも普通の掘り炬燵に対する語。「畳の上にあるもの」（山梨）で、ヤグラゴタツ（京都・大阪・和歌山）、アンカゴタツ（奈良）も置炬燵のことをいう。

◆あんか【行火】…アンカがほぼ全国に共通した呼称。富山のネコ、滋賀のバンドコの例がある。もっといろいろ拾えそうに思う。

◆ひばし【火箸】…事例は少ないが、ほぼヒバシ。鹿児島でヒバツ。平良でピウバシウ、長浜でカニピウバサなどとなる。

◆ひばち【火鉢】…ほぼ全国ヒバチ。東北にヒンバジ・スンバズ・シバジなどあるほか、長野などのシバチ、島根のフバチがあるくらいだ。ただ、種類として箱火鉢、長火鉢、瀬戸火鉢などの名称がいろいろ出てくる。

◆いす【椅子】…ほぼ全国にイスとコシカケの類が混在するが、沖縄地方はコシカケ系。

◆ござ【莫蔭】…総称としては、東北にゴンジャ（青森・弘前・八戸・安代）・ゴンザ（礼文・岩手・宮城・秋田）、秋田ではゴンザモシロとも。あとは九州までほぼゴザの一世だといえる。名瀬でグジャ、鳩間島でグザが莫蔭。珍しい例では七尾のヘトリが古い言い方だといひ、福岡でマクリといひ、ゴザともいうがこれは新しいとする。

ただ莫蔭には、素材や作り方で種類がいくつもある。蔦草を織った畳表製のいわゆる莫蔭のほか、薄べり（莫蔭の裏に藁製の蓆を重ねたもの）、上敷き（畳の上敷き）、花莫蔭（模様を織りだした莫蔭）、寝莫蔭（夏場に敷布団の上に敷く）などがあり、それぞれにいろいろな方言の可能性がありそうだ。

八丈島では①ゴザとしながらも、②イト（備後表で編んだ敷物）・③ハナゴザ（模様を織りだしたござ）・④コモ（勝手などに敷く粗く編んだ蓆）・⑤ムシロの5つの言葉を併記している。②が①の古い形か。④は⑤の一種と見ているか。

\*沖縄のムスは蓆系のモノだろうか。平良でも莫蔭は作らないとし「アダンバムス（あだん葉蓆）」を使うことが多い。同じ平良でビュグまたはビュグムスともいい、「最近、畳表を作る蔦で編んだ蓆。沖縄本島辺りから入った蓆で客用」とするのが興味深い。「ビュグ」はあるいは「備後」か。以上、敷物としての莫蔭と蓆やニクフ（ニクブク）が種類と呼称が交錯する可能性をもつモノだろう。

◆はしら【柱】…東北にハスラの例が何件かある。柱の種類として大黒柱がほぼ全国的で、一部ナカバシラなどの呼称が見られる。\*南島では、名瀬でハリヤ、沖縄でファヤ、池間

でハラ、多良間でバラとなる。

◆いた【板】…全国イタ。\*沖縄県の平良・池間・鳩間でイツァと変化。

◆さお【竿・棹】…全国的にサオ。\*沖縄でソー・ショー・サウ。棹の種類もある。物干竿はモノホシザオとホシモノザオに分かれるようだ。

◆はこ【箱】…東北でハゴとなるほか、ほぼ全国ハコであるが、\*沖縄地方でハク・パク・ファクなどとなる。種類としては、木箱、紙箱、りんご箱、みかん箱、マッチ箱、石油箱、茶箱などがあげられている。鳩間で、漁師の道具箱をナーブクという例があり、箱は「ブク」となる。

◆はしご【梯子】…ほぼ全国ハシゴ。ただ語尾が鼻濁音になるところが各地にある。沖縄ではファシ、池間でパシゴ・多良間でパシウ。

◆いど【井戸】…イド・エンドが大勢を占めるが、イガワ(熊本・長崎・宮崎・名瀬)・イガア(鹿児島・甑)・カワ・カー(沖縄・池間・多良間・鳩間)などが注目される。

◆ふる【風呂】…全国ではフロが基本のようだが、シフロ(青森)・シフリ(安代)・シフル(秋田)・シエフロ(河辺)からスエフロ(会津)・スイフロ(奥多摩)・セーフロ(秋山)の語が連なる。宮崎でユダルとするのは、桶でなく樽としているのが面白い。沖縄・平良・長浜・鳩間はユーフル。

◆しょうじ【障子】…ほぼ八重山まで含めてショウジ・ショージで全国共通だが、宮崎でショジ、鹿児島でショッ、甑でソージ。

◆おけ【桶】…かなり多くの情報が寄せられている。しかし、桶の多様な種類がその中に含まれていて、呼称の特徴は見出しにくい。桶一般の呼称は、全国的にはオケが支配的のようで、東北地方でオゲ、東北の一部にコガの方言があり、\*沖縄のフキ・ウーキ(平良・長浜・鳩間)が特徴的だ。次の肥桶の名に登場するタガ、タゴが、桶の総称として関西などから出てきてよいと思う。

桶の形態的な特徴からは、ハンゾー(新潟)・ハンゾ(『新編会津風土記』に「盤槽」：会津)・ハンギリ(静岡・鳥取・鳥根)・ハンボ(三重・鳥根)などがあり、浅くて大きな平たい桶にこのような名称が与えられているようだ。

鹿児島にタンゴ・タイ(樽)・ミソダイ(味噌樽)。担ぐのがコエタンゴ、蓋のあるのがコエダイとある。桶の用途に関する名称としては、下肥・糞尿用の「肥桶」の方言がいろいろあって、コエオケのほかコイオケ・コヤシオケ・ゲシオケなどとともに、タゴ(鳥取・広島・油木・福岡)・タガ(鳥

根)・ショウベントガ(佐渡)・タンゴ(三重・岸和田・兵庫)・コエタンゴ(岸和田)・コエタゴ(奈良・鳥取)・タゴケ(奈良)・コエタガ(鳥根)などの語が、主に西日本の各地に使われている。なお、籬はオビ・ウセダイ(負せ樽=肥料用)。船のミツタイ(水樽)がある。

◆こえたご【肥桶】…桶・樽類の中でも、用途上、特定できるものとして取り上げられている。桶・樽の方言と重ねてとらえる必要がある。主な方言としては、コヤシオケとコエタゴとがあるようだ。コエタゴ(北海道・岩手・東京・滋賀・大阪・鳥取・岡山・広島・油木・山口・徳島・愛媛・福岡・長崎・福江)・タンゴ(三重・和歌山・兵庫・香川)・タゴオケ(五箇山・石川・福井)・コエタガ(岐阜・鳥根)・コエタンゴ(三重・京都・高知・宮崎)・コイタンゴ(熊本)・コイェタンゴ(甑)、\*沖縄地方ではミジグワイフキ・ツファイタグ・ファイタグ、鳩間でコイタンゴ。

◆すだれ【簾】…東北にスダレ・シダレなどがあるほか、ほぼ全国スダレ。

◆ふみだい【踏み台】…かなり多様な語があり、詳しく調べておく価値がありそうな語である。フミダイのほか、フミツギ・アシツギ・セツギなどと背の高さや足の長さを「継ぐもの」という意味の語がある。鹿児島のアシツも同様の発想か。アガリダイ・キャタツ・アシアゲ・クラカケが各地(京都・兵庫・和歌山・富山)にある。最後のクラカケは、鞍を掛けておく古い道具が踏み台によく似ているための命名ではないか。八丈のゲンバが珍しい。

◆ものほしご【物干し棹】…わずかな事例だが、ほぼモノホシザオ。

◆はたき【叩き】…東北でハダギのほか、奄美や沖縄を含めてほぼ全国ハタキで同じ。別にサイハイ系の方言が近畿圏などにある。サイハイ(奥多摩・岸和田)・サイハエ(富山)・サイハラ(京都)・ゼアハレー(岐阜)・サンパライ(三重)・サエアハレー(滋賀)・サンハラ(奈良)、高知では単にザイといい、平良でザヤ、多良間でジャイというのは、いずれも「采配」あるいは「采」ということだろう。

◆ほうき【箒】…3頁余りの事例報告がある。まず興味深いのが、青森・岩手・河辺などにハギ(掃ぎ)の名があること。秋田からはホギ、秋山からハチ(ホーチ)が報告されている。竹・草・柴・棕櫚など素材により呼び分けたり、上箒・下箒と使い分けを示したり、滋賀のトーキョーボーキとあるのは東京製品か。鹿児島でホッ、平良・多良間でポーキウ、鳩間でポーキ。



◆参考 ◆ねずみ【鼠】…家屋に関する方言で、参考に【鼠】を加えておく。八丈でヨメドノ（嫁殿）「鼠の忌みことば。ヨメコサマとも。蚕が繭になってからの鼠の害がひどいので、それを防ぐために正月、膳をくみ、鼠に供える。さらに鼠をその名で呼ぶことを避けてこのように言う」として、民俗の記述があるのがうれしい。沖縄のエンチュは「家の衆」か「上の衆」の意味か。平良・池間・長浜でユムヌは「夜物」の意。多良間のウェーダ、鳩間のウヤザは「上座」だろうか。

### 3) 食器・調理具など

◆うす【臼】…「臼（つきうす）と磨（ひきうす）」を一体として扱っており、これに「からうす」（踏み臼）や「するす」（舂摺臼）も加わって、用途・形式などが交錯しつつ、多様な方言が混在している。事例は比較的多く収集されているが、これを形態や素材などの個別情報無しに仕分けるのは困難だろう。

◆おろしがね【下ろし金】…東北でオロスガネが多いが、オロシガナ（青森）が貴重。種類としてはダイコンオロシ（大根下ろし）が各地にあるが、デアゴオロシ（秋田）・デアコオロシ（愛知）・ダイコオロシ（神奈川・岸和田）・ダイコンオロス（宮城）・ダイコスリ（奈良・広島・香川）・ダイゴズリ（茨城）・デアコスリ（油木・山口）・オロシズリ（和歌山）などが見られる。単にオロシも点在。民具名で知られているオニオロシは拾われていないが、茨城にガリガリオロシがある。「ゴムのパチンコのような木の股に竹の刃を数枚渡したものだ」としている。\*沖縄では、シェーガナ・サイガナ（平良・長浜）・カナ（池間・多良間）・マンガナなど。北の端のオロシガナ（青森）と重ねると面白い。

◆かご【籠】…多様な方言が収集されている。まずは「籠一般」を表わす言葉をたどってみると、全国的にカゴが一般的だが、その中でカゴのゴが鼻濁音になる例がかなり広く見られ、東北から関東、北陸、中部（山梨・長野・静岡・岐阜）、兵庫・奈良に及んでいる。また、カンゴ（神奈川・十津川・和歌山・高知）・カグ（沖縄・平良・鳩間）となる例がある。名瀬でマゴ、沖縄にはティジョーキ（「持ち運びがしやすいように把手がついている。食べ物を入れてよく吊るす」）・バキ（「かご・ざるの一種。竹で編んだもの。底が深く、掘りだした竿などを入れて運ぶのに用いられる」）などがある。「竿」は「芋」の誤植だろう。平良でカグ・パーキ・ソーキが併記されているが、区別は書いていない。池間でパーキは「芋を入れるかご」、ムイジャウキが「竹製の中深のかご。麦や粟を入れる容器として用いられる。サウキより深いかご」とあり、パーキ・ムイジャウキ・サウキの3種のかごが区別されているようだ。

籠の種類は極めて多様だが、形態や機能が特定できる籠の名称として注目できそうなものを拾っておきたい。ひとつ目は「笊」に相当するものが混入していること。別に「ざる【笊】」の項目があるので、ここからは除外してあとで検討した方がいい。

籠の種類として「背負い籠」「草刈り籠」「魚籠」などの方言が抽出できないかと検討したが明確でなかった。クサカrikカゴ（栃木）・ショイカゴ（栃木・群馬・東京・富山・静岡）・ショエカゴ（青森・八戸・秋田・福島）・セオイカンゴ（十津川）・オイカゴ（鳥取）などがある。

魚籠は、ビク（弘前・栃木・群馬・東京・神奈川・富山・山梨・愛知・静岡・和歌山・徳島・福江）・ビツ（鹿児島）・ハキゴ（岩手）・カッコベ（河辺）・フンゴ（山形）・ロツペカゴ（岐阜）・サカナカゴ（岸和田・鳥取）・イオカゴ（宮崎）・イヨテゴ（甌）・アムデイル（多良間）。

◆ざる【笊】…ジャル（青森・八戸）・ザール（千葉・神奈川）・ザリ（富山・五箇山）・ザロ（長野・秋山）・ダル（和歌山）。

イカキ系の語が近畿から四国にかけて広がっている。イカキ（愛知・京都・大阪・十津川・岡山・徳島・香川・大洲）・イッカキ（和歌山）・イッカケ（奈良）など。これらが「笊一般」を差すかどうかは注意を要する。愛知では「米その他を洗って水を切るざるを主にいう」ようで、十津川でもイカキは「目の細かいざる。米や野菜を洗って水を切っておくもの」とし、「目の粗いざるはユスギという。これは芋などに使う」と区別している。岡山では「楕円形のざる」と特定し、香川の例は「中にご飯を入れ、腐らないように涼しい場所につるしておく」ものをいうとしている。

ソーケ（五箇山・福井・鳥取・岡山・高知・甌）も広く用いられている語で、五箇山では目の粗いのがザルで「目の細かいものをソーケという」と区別し、竹冠に皿と書く「方言漢字」まである。鳥取では「竹製の底の浅いものをいう。丸いのも長円のものいろいろある」としてマヤゴエゾーケ・コメアゲゾーケ・ムギゾーケ・マルゾーケ・クチゾーケ・ニワゾーケなどの種類を紹介している。

ソーキ（鳥根・広島・油木・沖縄・平良）・サウキ（長浜）・ショケ・ジョケ（宮崎・鹿児島）、シヨーク（岐阜・熊本・大分）、ジョーク（福岡）、ソキウ（名瀬）、シヨーキ・シャウキ・ジョーキ（多良間）・サウキ（池間・長浜）、パーキ（平良・池間・長浜・多良間・鳩間）などのバリエーションがあり、長浜でサウキは「竹で編んだ、平たくて円形のざる」、パーキは「サウキよりも幅広の竹で編んだ、丈夫で大型のざる」として区別をしている。

バラ（宮崎・鹿児島・甌）が「ざる」の仲間に入っているが、特異な形態と機能をもつもので、「直径1メートル以上のざるで、平らで深さが浅い。中で鰯を作ったり、餅を作ったりする。また農作物を乾燥させる時などに使う」とする。形態と機能が特定されるものが（味噌漉笊・手箕・篩籠など）

まだありそうだが、今のところ以上を抽出しておいた。

以上「ざる」は、地図化するとよい項目だ。また「かご籠」の項と比較する必要がある。

◆かま【釜】…全国ほぼ一律にカマだが、青森の事例に「テジビン（鉄瓶）、ヤガン（やかん）、チッバガマ（つばのついたかま）の総称」とあるのが注目される。どこまでが「かま」の語の意味の範囲だったのだろうか、改めて注意しておく必要がありそうだ。ちなみに、御飯を炊くときのつばのある釜は、とくに「ツバガマ」系の名で呼ばれて特定されているので、それ以外のものを含む「かま」の存在を考える必要があるということだろう。秋田で鉄瓶をテジガマと呼ぶのも参考になる。

◆なべ【鍋】…東北でナンベ、ナベの地域が広く、名瀬から沖縄地方にナベの名があり、鍋の種類に、ニンマイナベ（二枚鍋）～ゴンマイナベ（五枚鍋）などという大きさや、イーナベ（飯鍋）、スーナベ（汁鍋）、イラキナベ（炒鍋）などの用法の違う鍋がいくつも報告されているのが興味深い。

◆なべしき【鍋敷き】…ナベシキが多いが、広島以西（広島・油木・大洲・高知・福岡・佐賀・大分・宮崎・甌）にナベスケの例が見られる。平良・多良間のナベシウキウもこの類か。青森のナンベエダ（鍋板）、河辺のデアワ（台輪）、福島のナベダイ、埼玉のヒツキ（藁製の皿のような形のもの）、秋山のナベシケ（藁で丸く編んだもの）など、素材や形態の違いも名の違いに反映していそうだ。

◆ごとく【五徳】…ゴトクとサンボンアシとサントクとがあるが、「足が三本あるので」サンボアシ（北海道・青森）・サンボンアス（八戸）・サンボンアシ（新潟・三重）ともいう。サントク（群馬・富山・石川・三重・奈良・大洲）もゴトクと並記して紹介され、三重ではサンボンアシということが多くとしている。ただ、岡山の事例に「五本足のものと、三本足のものがある」とするのは誤解ではないか。珍しいのは熊本でサンソクという例がある。沖縄地方はほぼゴトクかゴトウク。

◆こんろ【焜炉】…コンロ（焜炉）とシチリン（七輪）が広く報告されている。このふたつがどう区別されているかがよく見えないが、シチリンは「こんろ」の一種とするところが多いようだ。ただし、秋田ではコンロは「土製の角柱形の焜炉」、シチリンは「土製の焜炉。円筒形のもの」とモノの種類として呼び分け、ナナリンは「土製の焜炉。円筒形のもの。劣勢」としている。しかし、奥多摩では、コンロが「炭火によって煮炊きする道具。丸形のもの」、シチリンは「角形のもの」と、形態は秋田と逆転している。関東あたりから西でヒチリンと発音し、関西に行くとかンテキの語が広く報告されている（滋賀・大阪・岸和田・兵庫・奈良・和歌山・大

分）。兵庫の説明ではカンテキを「シチリンのこと。すぐに顔を赤くしておこる人のこともカンテキという」と面白い説明をしているが、大分の説明では、シチリンは「土でできたものを言う」とするのに対してカンテキは「鉄の鋳物でできたものを言う」と種類の違いを意識していることがわかる。このふたつの語では、モノの違いと名前の違いが交錯している可能性がある。これも分布を地図化したい項目である。

◆しょくたく【食卓】…東北から関西・九州沖縄地方までハンダエ・ハンデア。茨城・千葉・神奈川・埼玉・長野・静岡・大阪・岸和田・長崎・福江でチャブダイ系の語になる。滋賀・京都・奈良でオゼン。

◆はし【箸】…岩手にハスの例があるほか、変化なく、ほぼ全国ハシ。ただ、名瀬でテイウムトゥ、沖縄地方で沖縄のメーシ、長浜のウミシウが珍しい。「手元」や「お召し」の意味か。ほかにハシウ（池間）・パシ（鳩間）もある。種類としては、形態から角箸、丸箸。作り方から割り箸、竹箸、柳箸、塗箸。用途からは菜箸（サイバシ）、真菜箸、火箸。儀礼にかかわるものに祝い箸、孕み箸などがあげられている。

◆さじ【匙】…サジは近代的なもので「昔はなかった」としているところが各地に見受けられる。（ちなみに考古学からは、逆に古代には匙が用いられていたのが、消えていったことがわかっている）。

◆しゃくし【杓子】…「飯杓子」と「汁杓子」が明快に区別されておらず混在している。前者とわかるものは、シャクシ系、シャモジ系、シャッペー系、ヘラ系、メシガイ系（含、イーガイ）、キナの6種類に分類され、分布図（図5）も示されているが、シャクシ系が全国的で、ヘラ系が北海道・東北に、シャモジ系は関東から関西九州まで、メシガイ系は南九州にあり、キナが宮古・先島地方にあるという。別にウグイス（七尾）は「昔あった器具。汁の実をすくう」とあるが、おそらくセツカイ（節介）という古い道具のことではないか。

◆わん【椀】…北海道から鹿児島までワン・オワンが普通であるが、広島・油木・宮崎にゴキ（御器）という古い語がある。椀のことを★名瀬でマーリ（まかり）というのも古風で、沖縄でマハイ、宮古・八重山でマカイ・マカルなどというのも貴重な報告だ。

◆さら【皿】…北海道から沖縄地方まですべてサラであるといえそうだが、多良間でシャラ、鳩間で小皿をカイキ、さらに小さいのをスライ、さらに小さいのをスライヤーマというところもある。この項目で注目されるのは、皿の種類の中の小皿と大皿の名称で、小皿に関しては、コザラ・コッザラのほかに、オテショー・オテショ（お手塩）という名が山形あたりから関東・中部・近畿・中国・四国・九州（大分・長崎）ま

で見られる。大皿の名としては、サファジ（秋田）・サハチ（鳥取・島根・広島）、それに皿鉢料理の有名な高知ではサーチ（盛り付け用の大皿）と報告されている。

◆さかずき【盃】…ほぼ全国サカズキ。チョコ・チョク（猪口）との区別が明確でない。

◆つぼ【壺】…東北でツッポ・チッポなどとなるほか、全国ツポ。★南島では変化があり、名瀬・多良間でチュブ、沖縄でチブ（耳壺の例）、平良では「壺」に相当するものもカミという。長浜もカミ。鳩間はスブと報告されている。

◆とっくり【徳利】…『方言大辞典』に「新のみ」と注記されているのは、「新項目」つまり追加項目ということか。英文説明は“a ceramic bottle”、中国語は「酒壺」とある。北海道から鹿児島までほぼトックリ一色だ。ただ、鹿児島でトックイ、★平良・池間・長浜・多良間にパカシウという名がある。「かめ形の酒器、五合入りから一、二升入りまでである」「車座になって酒を飲むときに用いる」「泡盛をいれるかめ」。7升から1斗も入るパカシウがあるようだ。

◆ちょうし【銚子】…報告例には、全国的にチョーシとトックリが拮抗し、それにカンピンが加わっている。英語の説明に、“a sake holder, a sake bottle”とあるので、この項目に「トックリ」が並んでも不思議ではないが、「婚礼で三三九度の盃をかわすときに用いる酒器を何と呼ぶか」などと質問したり、「酒のお燗をする容器」の名を問えば、限定的になったと思われる。岸和田・奈良・福岡・鹿児島・沖縄・池間・多良間・鳩間でいうカンピンの具体像が知りたい。沖縄地方には別にカラカラという独特の形態をもつ酒器があげられている。

◆はち【鉢】…全国的には、ハチで変化が少ないが、東北でハジ・ハズというほか、鹿児島・福江でハッ、甌でハーチ、★南島のバチウ（平良・長浜・多良間）・ハチウ（池間）などがある。

種類としては、こね鉢にコネバチ（長野・秋山・福岡）・ドンパチ（島根）・ダンパツ（鹿児島）などの方言があるようだ。結婚式に使う「最も大きくて平たい皿」をサハチ（皿鉢）といい（青森）、「大きな鉢、煮付け魚など、何でも盛る」のをサハツという（宮城）と大鉢の呼び分け例がわずかに紹介されている。

◆どんぶり【丼】…沖縄を含めてほぼ全国同じ。鹿児島・甌でドンブイ。

◆すりばち【搦鉢】…全国的にスリバチ系の語が広がるが、東北のシリバチ・シリンバズ・シリバジ・スリバツなどがあり、秋山のスレバチ、愛知のスルバチ、鹿児島のスイパツな

図5 シャクシ（杓子）の方言分布



（平山輝男編『現代日本語方言大辞典』明治書院、1989年）

どの変化がある。特徴的なのはカガチ（島根）・カガツ（広島）・カガス（大洲）のカガチ系とでもいえる語である。沖縄県のナイバ（平良・長浜）・ナイハ（池間）・ネーパー（多良間）・ダイパー（鳩間）がある。

◆すりこぎ【搦子木】…全国的にスリコギ、あるいはスリコギボーが広がっているが、マシゲ（青森）・アタリボー（静岡）・メグリ・メグリボ（秋田・岐阜）・メグー（島根）などが注目される。鹿児島にはスイコツ、甌でスイチャー、名瀬でシュルクギー、鳩間のシルングチが見られ、また、滋賀以西に、レンゲ・レンギの語が顕著に見られる。沖縄県では、ナイパヌキー（平良）・ナイハヌプトウ（池間）・ネーパーギー（多良間）など特徴的な語が登場し、搦鉢の名のナイバ・ネーパーなどと関連することがわかる。

◆けしつぼ【消し壺】…報告資料が少ない。ケシツボが主流。石川のケシガメ、滋賀のカラケシが珍しい程度。沖縄からの報告がないのは、この道具が無いからか。

◆ぼん【盆】…全国ほぼボン・オボン。沖縄地方でブンとなる。

◆めしびつ【飯櫃】…方言分布に特徴が見られる。全国的にメシビツで通用するが、オハチ系が北海道から富山・静岡と奈良までの東日本に。鳥取・島根・広島・山口にハンボ系の名称。九州の長崎・熊本・宮崎にメシツギ系の語。名瀬にクブシウ。南島には飯櫃に相当するものが無いという報告がさ

図6 ながし(流)の方言分布



(平山輝男編『現代日本語方言大辞典』明治書院、1989年)

れている。

◆じゅうのう【十能】…英語説明は“a fire shovel”としている。ジューノー系、ヒカキ系、センバ系は北陸と中国・四国(新潟・富山・石川・滋賀・鳥取・大洲・高知)などにある。福岡などでジューノーとヒカキは別物として、前者は鉄製で火鉢に火を入れたり、火のし(アイロン)にも使うとしている。鹿児島県のシスコは「火すくい」の訛りだろう。

◆じゅうばこ【重箱】…ほぼ全国ジュウバコだが、東北でジュンバコとなるほか、ジュウバクという例があるほか、鳩間でほぼジブク。ワリコは重箱の一種で、小さな箱が容器に入り、行事に携帯したものだという。

◆ながし【流し】…全国的にナガシがあるが、東北にメンジャ(水屋)、宮城にハスリ、京都以西にハシリが顕著に見られる。鹿児島・甕でハシー。(図6参照)

◆ひしゃく【柄杓】…ヒシヤクに対して、フシヤク・フィシヤク・フサーク、★名瀬・沖縄でニブ、平良・池間・長浜でサシ、多良間でシャシ、鳩間でフダル。フシヤクのフは、たとえば鳥根の方言で「ヒ」が「フ」になって、ひばち→フバチ、ひのこ→フノコ、ひも→フモという例があるのが参考になる。少し特異な例では会津でスサグというのがある。

◆ふきん【布巾】…ほぼ全国フキンだが、フキノ(弘前・青

森)・フキノ(佐賀・甕)という語が日本の北と南にある。埼玉のカケン、京都・大阪・岸和田・兵庫のフッキン、広島・山口・福岡・熊本・大分・宮崎はフイキンとなる。

◆ふた【蓋】…沖縄地方も含めてほぼ全国フタ。秋山に吸い物のフタのほか、カサの語があげられ、「ご飯を盛るワンの上にかぶせる小さな蓋。以前は冠婚葬祭の席には、ご飯もカサのついたワンで食べた」と説明している。

◆ふるい【篩】…比較的豊富にデータが集まっている。語としてはフルイとトーシが拮抗しているようだ。ケンドン・ケンド(岸和田・香川・愛媛)は要注意。ユイの例もユリと呼ばれる農具との関係を注目しておきたい。スイノー(京都・岸和田・福岡)の語が「篩」の名に当てられているが、この語は「うどんあげ」の名にも使われている。沖縄のシーノーやシイナウ・シーナとも共通するだろう。

◆ほうちょう【包丁】…沖縄地方でカタナ(沖縄でハターナ、平良・池間・長浜・多良間でカタナ)と呼ぶほかは、全国ほぼホウチョウ系(ホーチョー・ホーチョ・ホチョ・ホジョなど)で、富山ではホイチャが古いという。各地から包丁の種類が示され、刺身・菜切り・出刃などの名が報告されているが、その中で菜切り包丁に、ナガタン(愛知・奈良)・ナガタン(ガは鼻濁音:福井・岐阜)・ナンガタン(和歌山)・ナギタン(徳島)の名があるのが興味深い。三重などでいうナガタナ(菜刀)がその語源だろうか。

◆まないた【俎・俎板】…マナイタのほかに、サイバン(菜板)系の語(サイバン・セアバン・セアンバなど)と、キリバン(切り板)系の語(キリバン・キリバ・キリイタ・キーバンなど)がかなり広く見られる。名瀬でマライタ、沖縄はマナーチャ(平良でマナツァ、池間でマナチャ、多良間でマナタ、鳩間でマニツァなど)。

◆つるべ【釣瓶】…英語説明は“a well bucket”。追加項目らしく事例は少ない。北海道・東京・石川などでツルベというほかに、礼文・青森・岩手・秋田でチルッベ、広島でツルイ、鹿児島でツイベ。沖縄地方のクバジュー(平良・池間・長浜・多良間)は、クバの葉を丸く束ねて巧みに作られた独特の水汲み容器のことだろう。

◆まっち【燐寸】…文明開化の時代に登場したとされるマッチにも興味深い方言があることは、今回の民具名の基礎的研究に着手した当時から注目していたが、既存の全国調査事例には、ここで初めて出会った。マッチより一時代前の「付け木」と同じ「チケギ」の例があがっているところがある。また、青森のトチキギは、佐渡のトーツケギ(唐付け木)と同じ意味だろう。岩手のスルズケギは「擦り付け木」、面白いのは秋田のアメラカ、河辺のアメラッカで、これは「アメリ

カ付け木」の略語、関西にスリビ（滋賀・岸和田・兵庫・広島・大洲（愛媛県））やスルビ（十津川・和歌山）があり、大分のスリーブチは「擦り火打ち」が当てられている。沖縄のシキージは「かなり古い語形」だとしているが、どのような意味をもつものか。平良でチウキダキ、多良間のチキダキ、鳩間でシキダキは「付け竹」の意かと推測されている。

◆つびん【鉄瓶】…岩手から鹿児島まではほぼテツピン系の語だが、青森・八戸でカマといい、テズピンは新しい語だとしている。京都でテツピンのほかにオテツ。沖縄地方の平良から多良間まではヤクン・ヤクン・テチュヤクン（鉄薬罐）。鉄瓶と薬罐の語の区別は、それぞれの実態が何を指すのかをふまえた上で、流通の歴史をたどらなければならぬだろう。

◆やかん【薬罐】…ヤカンが全国的であるが、秋山・大分などでヤクン、沖縄でヤクン、平良・池間でヤクン、鳩間でヤコンとある。宮崎のカナヂョカ。また、チャビンという語が大阪・兵庫・奈良・和歌山・愛媛で報告されている。

#### 4) 山樵・狩猟・川漁の用具

◆おの【斧】…オノ・マサカリ・マサガリ・オノマサガリ・ヨキ・ヨギなどが収録されているが、ここでは、「おの」「よき」「まさかり」の実態の区別が問題になるだろう。漢字では「斧」を「オノ」または「ヨキ」とも読める。マサカリには「鉞」の字をあてているが、オノマサカリという名もあり、形態的には中間的なものがありそうだ。方言の使われ方を見ていると「おの」「よき」「まさかり」は必ずしも明快に区別されていない。形態や機能を厳密に区別すると名称の方が交錯していることになりそうだ。事例の中にチョウナ・チョナなどもあり、これらも実態が交錯している可能性があるか。

ちなみに、プロジェクトの川野和昭氏によると、鹿児島ではオノという言葉は無く、木を伐るためにヨキを用い、木を割るためにもヨキを使うが、これをワリヨキともいう。樵が使うのはハツリヨキという。佐々木長生氏によると福島では一般にヨキが通用し、会津でヨキというのは銀杏歯。刃先が長いのをマサカリという。只見ではヒラバヨキ。いわき（遠野）ではマサカリの形のものをヨキといい、会津ではマサカリの語は聞いていない。

◆いかだ【筏】・いかり【錨】…東北地方などでは「イ」の発音が「エ」と訛って、イカダ→エガダ、イカリ→エガリと変化する傾向がある。イス→エス、イタ→エダ、イト→エド、イド→エドなど。いす【椅子】・いた【板】・いと【糸】・いど【井戸】なども、同様に変化する。

◆しよいこ【背負子】…シヨイコが広いが、ベゴ（青森）は

牛、マッコ（八戸）・ヤセンマ（福島・神奈川・新潟）は馬にたとえた例。シェエバシゴ（茨城）・シヨイバシゴ（奥多摩・神奈川）などと関東地方には背負梯子の名がある。実際背の高い梯子状のものがある。

◆わな【罟】…ワナ・ワンナが一般的だが、バナナ、バナも点在する。\*沖縄地方にもバナとヤマとが並行してある。沖縄地方ではヤマは罟に限らず、犁などを含めた仕掛け類をいう。

◆のこぎり【鋸】…沖縄地方でヌクギリ・ヌクギウ・ヌキルとなるほか、東北でノゴと濁る以外は、ほぼ全国ノコ・ノコギリである。安代のシキリ、宮城のノコズリが珍しいぐらいか。

この項では鋸の種類が複数あげられているところが各地にあり、多いところは7種から10種も紹介している。その中で、大鋸についてオビキ（八戸）・ダイビキ（奥多摩）・ダイギリ・デーギリ（佐渡）・ダンギー（大木切断用の目の粗い大鋸：島根・佐賀）・ガンド（富山・五箇山・石川・福井・滋賀・兵庫）・オンガ（高知）がある。沖縄でガガイはヌクギリと同じとしている。ここでは拾われていないが、各地にガガリと呼ばれる鋸がある。同じ鋸でも形や用法と名称を特定する呼び名の広がりがありそうなので注意を要する分野だと思われる。

#### 【農耕用具】

◆すき【鋤】…“a spade: a plow”と英単語をあて、表題には【鋤】の漢字を当てているが【犁】の意味も含まれ、ふたつが区別されていないことがわかる。結果的に「すき」という言葉（「共通語」）で何を連想するか。それを何と呼んでいるかを総合的に問うているため、回答にも【鋤】と【犁】の両方の方言が含まれている。東北でシギ・スギとあるほか、ほぼ全国スキと答えているが、滋賀のようにスキ・カラスキを並べて、後者に「唐鋤」の漢字を与え「牛馬に引かせて田を起す鋤」と説明する。沖縄でエジェー、宮古・八重山にヤマ・マーヤマがあり、ヤマは「牛に牽引させて畑や田を鋤く農具」と解説している。この項目については本稿の第3章、4）を参照。

◆つるはし【鶴嘴】…全国的にツルハシがあるが、東北でチルハシ・ツルハス、奥多摩・埼玉・神奈川・山梨・長野・新潟・静岡などでツルッパシ、富山でドーズリ、五箇山でドーズルとあるのには「唐鶴」の漢字が当てられている。三重でトビ、奈良にトンガ（語尾は鼻濁音）があり、高知・大分にトゥルハシがある。島根でチーハシ、名瀬でチウナ、沖縄でチルバシ、多良間でチルバシのほか、平良でイシユグワイ（石鉞）、池間でナガウチャ、長浜でナガウツァという珍しい言い方が出てくる。

◆なるこ【鳴子】…英語説明が、“a clapper: a noise-maker: a bird rattle”とある。ナルコが全国的に見られるが、合わせてスズメオドシ系（シジメオドシ・スズメボエ・スズメオドカシ・スズメヨケなど）、トリオイ・トリオエもある。また、ソメ（愛知）・シウメウ（名瀬）は、案山子の別名ともかかわってきそうだ。

〔参考〕◆はなどり【鼻取り】…馬を曳くこと、馬を曳く人のことと中国語の解説があるが、馬を曳く棒、すなわち「鼻取り棒」についても、事例があがっている。青森でオモジラ、八戸でサエへ、安代でサへボ、会津でハナザオ、佐渡でクチトリ、三重でハナトリ。

◆まぐわ【馬鉞】…事例がやや少ない。マグワも広いが、マンガ・マガ系の語がかなり広く使われている。

◆いなむら【稲叢】…十数か所しかデータが無いが、東北から北陸にかけてのニオ・ニョ・ニューなどが特徴的。

◆いねかけ【稲掛け】…いなむらと機能的に近いが、特色のある方言が多様に展開している。ハゼ（ハセ・ハジェ・ハゼカケ）・ハサ（ハサギ）、イネカケ・イナキ（イナギ）・ハデ・ハンデなど。

◆いねこき【稲扱き・稲扱機】…全国的にイネコキあるいはイネコギの名が主流のようで、東北地方から北陸にかけてこれがエネコギと変わる。千歯扱きのセンバ・シェンバが山陰から九州に分布している。

◆み【箕】…ほぼ全国でミ。沖縄では「円形の平たいザルのような」ムイジョーキー、平良でムイゾーキ、長浜でムイザウキ、多良間でムイなどといっている。なお、種類としてトミー（唐箕）をあげているところがある。

〔参考〕◆ひる【簸】…動詞であるが、農具を考える上で重要な言葉なので、確認ができるのがあるがたい。東北から関東・中部・関西などにフル系（フル・フグ・ミブク・フルーなど）、ヒル系としてヒル（石川・七尾・三重・和歌山・鳥取）・ヒダス（静岡・福井）、サベルという語が岡山、広島、油木、徳島、大洲、高知にあり、サベル（愛媛）もある。名瀬でユリユリ・ヒリユリ、沖縄でユイン、長浜でユルという。「簸る」と「篩う」と「ゆる」、「ふるい」と「ゆり」などの民具名との比較検討が必要だろう。

◆むしろ【筴】…ムシロが全国的であるが、青森・岩手・秋田にモシロ、神奈川あたりから福井・岐阜・三重などにミシロというところが多くなり、和歌山・広島に及んでいる。沖縄地方ではムス・ムッスがある。

## 5) 船の用具・漁撈用具

◆ふね【船】…フネのほか、\*沖縄・宮古・八重山でフニ。船上用具なども書きあげられている例があるが、ここでは省略する。

◆ろ【槽】…北海道から鹿児島までロ。甑・名瀬でド。\*沖縄・平良・池間・長浜・多良間でルー、鳩間でリュウ。

◆ほ【帆】…全国的にホ、北陸や大阪などでホー、\*宮古・八重山でフ・フー・プーなどという。

◆いかり【錨】…ほぼイカリだが、\*沖縄県の宮古（平良）・池間・長浜にウブというのがあるのが特徴的だ。「重石」が「ウルシ」「ウルシウ」「ウブー」などに変化したものかというコメントがある。

〔コラム〕せみ【蟬】の方言が項目にあった。民具ともかわるので内容を検討してみた。虫の蟬は、東北地方から北陸にかけてシセミとなるほかは、ほぼ全国セミで、沖縄は別として、地域的な特徴は少ない。

その中で注目されるのが、大阪湾に面した地域（大阪・岸和田・和歌山など）に限って「セビ」と後半が濁音になる例があることだ。ここから思いつくのが、江戸時代から明治初年まで「千石船」や「北前船」あるいは「弁財船」と呼ばれて近世の海上交通を担った大型運搬船があるが、この帆柱についている部品についてである。帆を巻きあげるときに用いる木製の滑車で、これが「セビ」あるいは「セミ」と呼ばれていた。その語源は明らかでないが、私には帆柱の上部に付けられた小さな四角い木の塊が、まるで「蟬」が柱に留まっている様に見えたからではないかと以前から考えていた。ところが「セミ」と呼ぶところが無いわけでないが、どうも「セビ」と濁るところが多いように思われて疑問に思ってきた。そこで「蟬」の方言のあり方をこの辞典で見ると、全国方言の中で唯一大阪湾の地域に限って「セビ」の方言が見られる。実はこの地方が「弁財船」の全国の拠点となった地域であったことが重要だ。この地域でこの部品を「セビ」と呼んで、弁財船の船乗りたちにそう呼ばれた結果、「蟬」を「セビ」と言わない地方でも、この部品に限っては「セビ」で通用するようになったのではないか。そう考えてよい根拠が現れたということである。

◆やす【錨】…東北でヤシ、福島から関東・北陸へかけてヤス。千葉の報告には、モリは「魚を突いて捕る道具」として「やすとの区別はない」としている。同じく奥多摩では「箱眼鏡で魚の様子を見ながらモリで突く」とあるように、「モリ」という例が各地から提出されていて、「ヤス」との区別は明らかでない。ちなみに筆者は、「モリ」（錨）は投げて突

く漁具で、「ヤス」は投げずに手に持って突く漁具だと一応区別しているが、この項目には、そのような配慮はない。ただ、沖縄でイジーム、平良でウギヤム、池間でウギン、長浜でウギム。鳩間でユクンなどの実態はどちらに属するものだろうか。

## 6) 諸職・手仕事の用具

◆かなづち【金槌】…全国ほぼ一律。

◆つな【綱】…ほぼ全国共通でツナ。五箇山では「ツナは新しい言葉で、本来は縄とともにナワと言った」としているのが興味深い。高知・大分でトゥナというが、大分では「トゥナ・ナワの区別は必ずしもはっきりしない」とある。各地に通じる場所があったのではいか。つな（綱）となわ（縄）との区別に注意する必要があるようだ。「ナワの方が細くて、これをより合わせてツナになる」とするところがある。しかし区別は微妙だ。なお、藁ではなくて麻を細く編んだものをホソビキと呼び分けている。\*沖縄でチナー、池間・多良間でシナ、鳩間でシナ。

◆なわ【縄】…ほぼ全国ナワであるが、八丈・大分でノー、甌・\*沖縄・平良・鳩間でナー、池間・多良間でシナと言って「縄と綱を区別しない」とするのが興味深い。縄の種類として、滋賀でスガイ（物を束ねる細い縄）、鳥取でツガイ（藁を5、6本束ねてつなげて長くしたもの。普通一尋ぐらいの長さにする）というのが注目される。筆者が知る静岡の沼津の例では、これは藁を編みずに束ねたままで縛るものをいう。

◆わ【輪】…ほぼ全国でワ・ワッカ・ワーだが、これ以外にも方言があるので注意が必要だ。宮崎・鹿児島でワサ、\*平良・池間・長浜でマーク。

◆はりがね【針金】…ハリガネとするところと、東北や関東中部などにハリガネのガが鼻濁音になるところがある。\*沖縄でチンラ、平良でチウツツアガニ、長浜でチウンダガニ、多良間でチウンダ、鳩間でシンダがある。

◆ぼう【棒】…棒の総称は、\*池間・鳩間でパウと表記されているほか、沖縄地方を含めて全国ポー。ここには、その種類が紹介され、オーコなど天秤棒の系統に独自の方言が若干拾われている。

◆ものさし【物差し】…ほぼ全国モノサシ、またはサシ。関西から西日本にサシがめだつ。沖縄でジョウギとバンジョウガニ。平良でムヌパカイウ（物測り）という語がある。

## 7) 交通・社会の用具

◆にぐるま【荷車】…ほとんどニグルマと回答しているが、特徴のあるものとして、ダイハチグルマ（大八車）系の語がある。青森では、「ダエハジグルマは、大正の初めごろ入ってきて、在の百姓は青森からこれに下肥を積んだり、小作米を積んだりした。大変重宝がられた」としている。埼玉の例では「人が引く運搬車。これを東京ではダイハチグルマと言っている」とし、東京の事例では「二輪の大きな荷車」としている。兵庫・岡山・山口・福岡・佐賀・宮崎にはシャリキの語があり「人間が引く荷車」「人が引く二輪の荷車」としている。「大八車」に相当するものだろう。このほか、岡山・広島などでネコグルマの語が報告されているが荷車的一种で「土などを運ぶ一輪車」に違いない。これだけをとりあげて全国の方言名を調べておきたい民具だ。

◆ふろしき【風呂敷】…フロシキとするところが広いが、東北でフロシギ、フルシギなど。フルシキの語が関東から中部（八丈・神奈川・新潟・佐渡・長野・静岡・愛知・岐阜・兵庫・大阪・和歌山）、ユタン・ユータン（油単）が広島・油木に見られる。平良などでウチウツヤ・ウチウツビウというの自家製の風呂敷をいい、三角に折って頭にかぶったり、物を包んだ。

◆もっこ【畚】…ほぼ全国モッコ。フゴを合わせて報告しているところがある。沖縄ではオーラ、平良でオーダ、池間・長浜・多良間・鳩間でアウダが特徴的だ。

【参考】◆かつぐ【担ぐ】…民具名ではないが、運搬の行為を示す語彙が13ページにわたり、豊富に収録されている。この項目は、民具研究では、とくに運搬具の名称におおいかかわってくるので、ぜひ丁寧に検討しておくことが望まれる。『日本言語地図』でもこの項目が取り上げられていた。ここでは先を急いで指摘するにとどめておく。

## 8) 遊び・教育・信仰

◆おもちゃ【玩具】…オモチャというのはほぼ全国的だが、佐渡で「モチャソビ」があるのが注目される。おもちゃの語源とされる「もてあそび（弄び・遊び）」が残存した貴重な事例だ。アスンモン（福岡）・アスッドツ（鹿児島）・アシウビウドー（多良間）という例は「遊び物・遊び道具」から。鳩間島のムタビム、平良のンタビウムヌが「弄び物（遊び物）」であることもわかってくる。

◆おてだま【お手玉】…『日本言語地図』にもこの項目がある。標準的なオテダマは（福島・千葉・東京・山梨・岐阜・奈

良)、少し飛んで愛媛・長崎などに広がるが、むしろ多彩な方言が広がっているので、少し詳しく説明しておこう。アヤコ(北海道・青森)・アヤ(長野)・アヤオリ(大洲)がある。遊び方と関係があるか。ダマコ系として、ダマッコ(岩手)・ダマ(秋田)があり、オヒトツ系として、オヒトツ(宮城・新潟)・オシトズ(栃木)があげられる。遊び歌のはじまりの言葉が名詞化したものだろう。ナンコ系として、ナンコ(茨城)・ナンゴ(千葉)・オナンゴ(群馬)・オナンコ(神奈川)・イシナンコ(兵庫)・イシナンゴ(小豆を入れる:鳥取)・イシナゴ(富山)がある。

オジャミ系として、オジャミ(八丈島・富山・石川・静岡・京都・大阪・兵庫〈オンバラが古い〉・奈良・鳥根・四国四県・熊本・宮崎)、沖縄県にはウーサーラ、ウサライなどがある。これらのうち、富山のイシナゴには「石な子」の意味だとして「古くは優勢であった」と注記があり「オジャミ」は劣勢形とする。兵庫の「イシナンコ」の解説には「小石のお手玉。片手で一個の小石をほうり上げ、同じ方手で多くの小石の中から、小石を一個拾い、ほうり上げた小石を受け止める。次に二個、三個と取っていき、最後に多く取った者が勝つ」としている。小豆を入れた個袋のお手玉は「オシナンコ」と呼び分けているのか分けて説明があるが、鳥取では小豆を入れたものもイシナンゴと呼んでいる。なお、遊戯の名称として次項の「おはじき」も参照のこと。

◆おはじき【御弾き】…ほぼ全国的にオハジキ・ハジキで通じているようだが、東北でオハジギ・オハズキなどとなり、オハズコなどともいう。キシヤゴ(群馬・埼玉)は、この遊びに使われる貝(キサゴ=細螺)という小さな巻貝の名による。この貝の方言にシタダミ・ゼゼガイ・イシャラガイなどがある(広辞苑)ので、山口でおはじきをイシャラというのもこの系統の名だとわかる。キサゴの方言とおはじきの方言の交錯状態を調べるのも面白そうだ。長野でキシヤガエというのがガラス片を使った遊びだとしているが、もともとは貝の名から付いた名前ではないか。セコ(岐阜)・ヨラミ(愛知)など注意しておきたい。ビードロ(富山)・ガラ(新潟)はガラスのかけらを使ったことから。なお、新潟でノンダリというのは土を焼いて作られたものが使われたときの名前で、大正期ごろのものとしている。兵庫でメンチ、和歌山でメンコとするが、いわゆる厚紙で作った「面子」の遊びの名にも通じるか。沖縄でイットウガヤー・イットウガヤー・イチルガヤーなどがあるのは、何か意味があるのか。長浜で「イチルガ、ヤイ」と声をかけて貝をばらまくという遊び方と関係があるだろうか。

◆こと【琴】…コトが、東北でコド、池間でクドウになる以外にほとんど変化なし。

◆こま【独楽】…総称としてのコマは全国だが、東北でジグリ(青森・弘前・河辺)・ジググリ(安代)、沖縄地方でもジウ

ーグル(平良・池間・多良間)があるのに注目したい。青森では「男子の遊び。木製で直径二十センチくらいのこま。縄を巻いて回す」、河辺では「穴のあいたお金に棒を刺して回すもの」としており、モノの違いがありうる。ズッコレ(秋山)は「丸い木をのこぎりで薄く切ったものに心を通して作った。買って来たのはコマ」とする。千葉のゲンブが珍しい。大きなものはウスゲンブといい「中をくり抜いたもの。うすに似ている」とする。

そのほか、種類の違うこまに「ペーゴマ」がある。群馬・埼玉・東京・山梨・静岡から報告されているが、群馬の例に「鑄物のこま。軸はなく、底の溝にひもを巻きつけて回す」と簡潔に説明されている。「ペー」が巻き貝の「ばい」と関係があることを予想させるのは、三重の例でパイゴマ(「ばいの貝殻に似せて鉄や木で作ったこま」とすること)や、いわゆる「ペーごま」のことをパイというところ(京都・大阪・岸和田・奈良・和歌山・高知)が西日本に見られる。岸和田では総称はコマだが、パイとカネパイ・カイパイも並列されている。カイパイは「貝でできたペーゴマ」と理解されているのが面白い。ほんとうは逆で、巻貝のパイのこまがモデルになって鉄製(鑄物製)のペーごま(カネパイ)が生まれたと思われるのだが。なお、十津川でデヤボール(竹の棒に糸で結んでこまをつけ、糸で回しこまを上下させて遊ぶ。明治、大正のころはやった)と報告があるのが貴重だ。ツンビ(長崎)・ヘソゴマ(大分)の語も興味深い。コマの総称として、東北地方のジグリと沖縄地方のジューグルが国の両端にあるのが重要だろう。この辞典ではジューグルには「地車」の漢字が当てられている。鳩間で単にクマというのは「共通語からの転化語」として「昔はイモガイ科の貝の一種」で作った島固有のコマが紹介されている。沖縄地方の「ゲール」が車であることは地元での理解でもあるわけだが、「クマ」が「コマ」だとすると、共通語の「コマ」もあるいは「クルマ」という言葉と無縁ではなかったと想像される。言語学者はどう見ているだろうか。

◆しょうぎ【将棋】…ほぼ全国共通でショウギ。

◆まり【毬】…マリが全国的だが、青森にマルと、兵庫にマール、岡山・広島にマル、宮古・八重山にマールの語がある。沖縄はマーイー、平良でマーイウ、池間でマーイ。

◆めんこ【面子】…多彩な方言名がある。パッチ・ビダ・ベッタ・メンチ・パンス・パチ・パッチン、鹿児島でカッタなど。

◆こくばん【黒板】…全国的にコクバンが主。東北でコグバン、コグンバン、中部以西でトバン(長野・十津川・鳥根・岡山・広島・油木・福岡)の語が登場する。福岡の例には、トバンは「黒板のもともとの言い方」という説明がある。トハン(広島・山口)もある。池間・長浜でヌリバンがあるのが



珍しい。

◆こくばんけし【黑板消し】…この名称については、数例が拾われているだけだが、秋田でコグンバツギ、岸和田でケシモン、岡山でトバンケシ（塗板消し）がある。しかし、この辞典には、鹿児島で普通に使われている「ラーフル」の語が収録されていないのは残念。学校制度が出来た時代に、黑板・白墨とともにセットで伝わったとき、この外来語が用いられた時期があったようだ。ラーフルの語は文房具業界では今も普通に通用している。

◆すずり【硯】…東北にスズリ・シヅリなど、沖縄のシヅリ、平良などのシヅウなどのほか、ほぼ全国スズリ。

◆ふで【筆】…東北でフデと濁り、沖縄でフリ、宮古・八重山地方でフディとなるほかは、ほぼ全国フデ。

◆ほん【本】…全国変化なし。

◆ふえ【笛】…ほぼ全国フエだが、宮古八重山で特殊な語がある。ピー（平良）・ヒーダキ（池間・長浜）・ビシユダキ（多良間）・ピラキ（鳩間）。

◆しめなわ【注連縄】…ほとんどシメ・オシメ・シネナワで、平良でシビナー、鳩間でシビナージナ。

八戸のトスナ、河辺のトシナ（年縄）以外に方言らしいものは報告されていない。

◆じゅず【数珠】…全国ほぼジュズ。東北でジュズ・ズズ・ジジなどとなるほか、関東・北陸関西などにズズの例がある。甌でズーズ。

◆にんぎょう【人形】…北海道から沖縄までニンギョウの語が見られるが、青森でニニョ・ニニョコ、岩手・秋田でニンギョ（ギは鼻濁音）、安代でジジヨッコなどがある。筆者が追いかけた村境の人形神の呼称であるニンギョ様・ニニョ様・ジンジヨ様と連動する。ジンジヨは地蔵にも通じるが、人形のこと。富山からは古い言い方でニニョという報告がある。秋田のオホコサンの1例は「伝統的な着せかえ人形」というから、いわゆる「這う子（ほうこ）」と一連の人形だろう。八丈島のクサメは「おもちゃとして作った人形。着物を着せて遊んだ」としているが、草人形の名だったと考えられる。愛知・福井と中国・四国地方にデコ・デコサンの語が登場する。木偶ばかりでなく、人形の総称になっているようだ。沖縄のチューハタは、沖縄人をウチナンチューというときのチューとすると、ヒトカタのこと、鳩間のフスカタが「昔の言い方」だというのがフスも人の意味の言葉だろうか。

### 3. 民具の方言名を考えるために

最後に、今後、民具の名称を考えていく上で、この『方言大辞典』の調査方法と成果をふまえ、その方法がもつ問題点・限界を明らかにすることで、この成果を有効に活用することを考えてみたい。

#### 1) 事例数の問題

この大規模な『方言大辞典』に収録されているデータが実は日本全国の各都道府県から、わずか1～3か所の調査地点から得られたものであることは先にも記したが、たとえば、選び方を概観すると、県庁所在地に近いところをまず選び、従来の方言研究で特異な方言分布を示す地域を加えるように配慮されているようにも思われる。沖縄県だけは6か所が選ばれたのは、あえていえば島ごとに方言の特色がある沖縄諸島の状況を勘案して調査地点を増やす配慮をしたということだろう（前出の注1）。

しかし、その1～3か所で各都道府県の典型的な事例がうまく抽出できている保障は無い。そのことは、民具研究の重要な文献とも言える内田武志『静岡県方言誌』がある静岡県の場合などで具体的に検討すると一目瞭然である。それにしても、民具の地方名（方言）の全国比較がなされているモノ（民具）は、まだごく限られている現状を考えると、この『方言大辞典』の成果を批判的に取り入れながら検討をしていくことは有益だと考えるのだ。たとえば静岡県の県内に限ってみても、ある特定の語彙の方言バリエーションだけでも、数十種類にもなるほど豊富な場合があり、わずか数か所のデータだけでその県を代表するような方言がとりあげられるかどうかは疑わしい。しかし、そういう例があるということが示されていると割り切ってとらえても、全国的に何らかの傾向が見出せる可能性はあると考える。

今後の詳細な調査で、ここに示せた「傾向」が詳細に検証されて、再確認されることも、否定されることもありうるだろう。それでも今後の検討の手がかりになることを期待したい。

#### 2) 安定的な「共通名」の可能性

ほぼ全国一律に用いられている呼称がみとめられる項目が、かなりの数あることがわかった（「はじめに」でもふれているが、それらの項目には◆印を付けた）。『方言大辞典』の調査では、「項目」ごとの語を示して「方言」を収集することが行われているため、その語が地元でも用いられていると回答された可能性が否定できない。しかし、それにしても例外が少ないということで、この語を「共通名」として提示することができることが期待される。この場合、名称は比較的安定しており、今後の調査で特異な呼称の例が出てきたら、貴重（希少）な例だと認識できる。なお、そのような場合でも種類（つまり下位分類）の名称がいろいろ出てくる可能性に

注意をはらっておくとよいだろう。

全国ほぼ一律といっても、日本国内で沖縄地方だけに特徴的な方言のバリエーションが認められるパターンが数多くあった(★印)。沖縄方言の位置付けにもかわり、古い日本の古典に登場するような言葉が生きている場合があったりするので注意が必要だ。

### 3) 総称と種類(下位分類)

ひとつのモノの名称のうち、その種類(下位分類)が示されているモノについては、それらを別にまとめて検討すべきである。たとえば「下駄」「笠」などの項目の中には、さまざまな種類の下駄や笠の方言が紹介されている。「笠」の項目の中では、「竹皮笠」の方言が豊富に登場しており、これなどは別項目で調査したら、いろいろな地域呼称のバリエーションが期待できそうだ。「下駄」の場合には、分類基準が、板の形と歯の構造、素材、加飾技術などで可能であり、それだけで組み合わせは千差万別の可能性がある<sup>(2)</sup>。それでいて人気のある特徴的なデザインの品は、その固有の名称が知られることになる。つまり、分類基準どおりにきちんと分類名が付けられるのではなくて、下位分類名は、ずいぶん気まぐれに命名されて普及しているということだ。民具名のリストを作成するときには、上位分類の名称の下に、系統的に分類名を列挙するのではなくて、分類基準はバラバラでもその特徴的なものは是非とりあげて並列して検討することが有効だろう。地域的に流行した品物の広がりと呼称の広がりとして理解できることになるかもしれない。

注(2)「下駄」の命名基準を見ると、①-1 日和のよい時に履くか雨天用か雪道用か、①-2 庭用・露地用・湯屋用(使用環境)、②男物・女物・児童用か(使用者)、③台と歯の関係(削り物か差し歯かなど)(構造)、④台の形(長方形、楕円、隅切りなど)と厚み、「のめり」「こっぼり」など(台底の形、中折れ構造など)、歯の高さ・厚み(形態)、⑤台の素材(桐・杉など)と白木か焼入れか漆塗りか畳付きか(加飾方法)、⑥緒の素材、太さ、色など。これらの要素がいかに組み合わせられて作られているかがデザインのポイントになり、「芝翫下駄」のように特別に人気のあったデザインに固有の名称が付く例がある。これだけの基準があると、ひとつの基準で一律に名称を分類することは不可能だとわかる。形態と機能が限定できる「標準的な名称」が成り立つのは、全国規模では「下駄」のレベルまでだろう。それに地域的に人気があって、ある程度の広さに流通したデザインや機能の品物が加わるというのが現実だろうか。以上、日本はきもの博物館で長年はきもの研究にたずさわってこられた市田京子氏の教示による。

### 4) 共通語形設定による方言名調査の限界

『方言大辞典』では、「調査項目は共通語形で示したが、調査のねらいは、その共通語で表わされる意味に該当するもの

を各方言で採集し、各方言での意味・用法を明らかにすることである」とし「共通語形は、あくまで意味の枠組みを示すものであって、調査の手がかりとするものである」と述べている(1巻321頁)。

この辞典の調査では、地域の方言を収集するに際して、「共通語形」を示す以外には、個別の語彙の「定義」をしているわけではないということだ。解説にあるように、ある言葉(いわば「共通語型」)を示して、それからどんなものを連想するかは調査を受ける人たちに任せているということだろう。そして、「あなたの地元ではそれを何と呼んでいるか」と質問する方法をとっていると受け止められる。

たとえば、「すき【鋤】」という項目は、筆者が承知している民具研究の成果を前提に見ると、この『方言大辞典』の限界が露わになっている象徴的な部分だと思える。

まず、「すき」には【鋤】という漢字が与えられている。しかも、項目名のすぐあとに、英語で“a spade: a plow”と書き加えられているのを見ると、設問の「すき」には、ふたつの「すき」すなわち、人力で土を掘り起こすシャベル状の農具(鋤: a spade)と、畜力で引かせる耕起用の農具(犁=からすき: a plow)と、両方の意味が混在している。農具をよく知っている回答者は困ったに違いない。漢字を当てるときに【鋤】と【犁】の両方を並べておけば、この項目で聞いている「すき」の範囲を広くとらえてよいと分かるが、設問が混乱しているのを受けて、どちらかだけを答えた場合と明らかに犁について回答している例もある。名称だけの回答には両方が含まれている可能性があり、二つを仕分けることはできない。東北でシギ、スギとあるほか、ほぼ全国スキと答えているが、滋賀のようにスキとカラスキを並べて、後者に「唐鋤」の漢字を与え「牛馬に引かせて田を起こす鋤」と説明をしている。沖縄の事例も「犁(からすき)」の報告で、マヤマなどの方言を紹介し、「ヤマ(牛に牽引させて畑や田を鋤く農具)」と解説している。ところが解説に「鋤」の漢字を使っているのが不自然に思われる。設問の漢字に従ったのか、もしかすると辞典編纂者が校正したのかもしれない。設問の不十分さで、せつかくの現場情報が活かしていないのが惜まれる。

この事例から、この辞典で紹介されるモノのすべての項目に、この「すき【鋤】」の事例と同じ問題が含まれている可能性があるといえる。提示された「共通語形」が何を示すのか、手放しで聞くのであれば、「かな」、つまり音だけで質問すべきで、漢字も無い方がいい。まして外国語の採用は混乱を増幅するだけだろう。

「鋤と犁」のように、互いに重なり合う概念がありうる項目が、他にもたくさんあるのではないかと。たとえば、籠と笊、桶と樽、鍋と釜、鉄瓶と薬缶など。一般には当然区別されると思われようなモノにも、方言ではモノのあり方と名称が入れ替わるような交錯が確認できるとすれば、むしろそれが今後の探求の手がかりになる。項目どおしの境界領域では、モノと方言名は交錯して存在するのが、現実のあり方で

はないだろうか。これをどう処理すればよいだろうか。

ただ、実際にはこのような交錯がありうる項目ばかりではないので、注意して読み取れば、この辞典作成の成果から汲み取れるものも多いはずだ。混乱が起こりうる事項がどれかを判断する材料も抽出できる可能性がある。

#### 5) 「道祖神」の方言

「ことば」と実態との複雑な関係を物語る例としてもうひとつ「道祖神」の例をあげておこう。「道具」「モノ」とみなしにくいので本文のリストには並べなかったが、石造物（丸石、男根形、彫像、文字碑など）や木偶・藁人形などの実態を伴う「信仰民具」の一例ともいえる対象だ。『方言大辞典』の項目には「どうそじん【道祖神】」英語で“travelers guardian deity”とあり、中国語で「守路神」と説明がある。定義はそれだけだ。つまり、ここでは出題者には、民俗学の成果は全く考慮されていないことが明らかで、そればかりか中国語の「守路神」を持ち出したところからは、「道祖神の招きにあいて…」旅に出た松尾芭蕉の知識の段階にとどまっていることが想像される。回答事例自体が少ないが、「該当する語形を得られなかった」「実物がなく語形もない」「民俗としてなく、該当する語形も得られなかった」という回答が並んでいる。これは、単に「道祖神」という「共通語

型」を提示して、全国を対象に聞き取り調査をした結果として当然の回答だったといわざるをえないだろう。「道祖神」の研究成果からすると、「道祖神」は必ずしも民俗語彙として方言名の中に浸透している語彙でない。拾えたわずか10数例の中に「道祖神」の民俗語彙として予想される「ドーロクジン」が2例、「サイノカミ」が1例含まれている。あるいは、こちらを使って聞けば、全国的に類例が拾えたかもしれない。「道祖神」という神名だけを問うのではなく、具体的な石造物に狙いを定めて問うたり、「このような内容の信仰対象の民俗神を地域では何と呼んでいるか」と問うたら、もっと豊かな民俗世界が引き出せたに違いない。しかし、この調査があくまで言語学による方言調査であったという限界がある。名称だけからの探求ではこの種の民俗語彙を探ることがいかに困難かを物語っている。筆者らが計画した今回の民具の一覧表づくりも、同一とみなされる民具の方言を集めようとするものであるが、この『方言大辞典』と同じように「共通語型」から方言名を問う調査を行ったとしたら、同じ誤謬を重ねることになるという警鐘を鳴らしてくれていることに気付かなくてはならないだろう。改めて「ことば」とモノの関係の基礎的なあり方が問われていることを『方言大辞典』におけるモノの名称についての情報が教えてくれた。